

山鹿良之氏から聴いたこと、学んだこと

藤井 貞和

れることがわたましの第一である。

「琵琶でタマシイを入れることだ。山鹿良之さんはいつもそのように話していた。わたまシイ。

伝承文学資料集成18（高松敬吉編著『宮崎県日南地域首僧資料集』、三弥井書店、二〇〇四）・19（荒木博之・西岡陽子編著『地神盲僧資料集』同、一九九七）・20（野村眞智子編著『肥後・琵琶語り集』、同、二〇〇六）と、三冊が揃って、口承物語の研究のこの方面での今後を、大きく支えることとなる。

18では永照寺文書のなかに「祝言」「琵琶尺」以下の明治本と大正本（影印）とを見ることができる。

19には地神経釈文（長久寺文書）、エンギ経など（祭文、成就寺文書）、ならびに佐世保盲僧祭文を収録する。

野村眞智子氏による20は、肥後（熊本県）琵琶の語り、語りのままに翻訳する。口写真に山鹿良之、野添栄喜、西村定一という語り手を配し、野村氏のテープ起こしによる本文資料（二十四種）と、野添資料である手書き台本（四種）とを内容とする。本文資料には（カタリ）（3音）（コトバ）などを傍注し、

演唱の現場を髣髴とさせる工夫が見られる。巻末の「肥後琵琶探訪報告」（『伝承文学研究』13、一九七四・三）は氏の卒業論文である。ここにもCDを付して成る（わたまし神事〈山鹿〉、都合戦筑紫下り〈同〉、餅酒合戦〈二三〉〈野添〉および端唄〈一〉〈中山米作〉）。

このたびの「肥後の琵琶弾き山鹿良之の世界」語りと神事」（RTES and TAFES with BIWA Yamashita Yoshiyuki, Blind Musician of Kyushu）はCD三枚（および解説書五十六ページ）からなり、最古は一九六三年七月三十一日録音というワタマシである（約二十三分三十秒）。渡御、移徙を「わたまし」ということは十三世紀より記録があり、ワタマシ（渡りいまし）にちがいない。十世紀の『うつほ物語』（祭の使）には「わたます」という事例があるとされる。転居するのは神々で、あやかるようにして転居をわれわれもする、ということだろう。新築には鳴り物を最初に入れば神々の氣にいらぬから、琵琶を入

CD評として、六十歳台の山鹿さんによる、張りのある、最高の声と演奏とであることを言っておくべきだろう。般若心経を三度読誦して演奏にはいり（本調子）、そもそも日本は葦原国以下、島のはじまり、国のはじまり、神々のはじまり、万物のはじまり、新築のしだいをつぎつぎに神仏の加護だと辿りすすめる、まことに力づよい語る「文学」である。

野村編著『肥後・琵琶語り集』にある「わたまし神事」と、時間をへだてて比較することがわれわれにはできる。

つづいて古いのが、野村氏の採録する「あざかけ姫」（約五十九分）で、一九七〇年十月六日録音というから、じつにすこみのある時代の山鹿良之のをのこしてくれた。野村氏が大谷大学での卒業論文を書こうとした際に聴き取ったという、これは幻のテープではなからうか。「肥後琵琶探訪報告」（『伝承文学研究』13、一九七四・三）は野村氏による貴重な一端で、何眞智子論文と称され、一九八〇年代「調査」でのバイブルの一種だったと思う。

『肥後の琵琶弾き 山鹿良之の世界』語りと神事』の解説書では、日本音楽研究者ヒュー・デフランティ氏が、適切にフォロー調査を試みており、「その話の数少ない琵琶弾きのヴァージョンのなかでわかる、山鹿の話における独自の特徴は、よく知られた中世の説教語りのなかの主役、俊徳丸の誕生で終わる」と説明される。あぜかけ姫から俊徳丸へと、ストーリーとしてもつながるように語られる、この山鹿による独特の語りであるとはどういうことなのだろうか。山鹿によってあぜかけ姫と俊徳丸が一連となった。たしかにそうも言える。しかし語りとしての必然の糸、必然の意図がそれでは見つかからない。やはりあぜかけ姫がまぎれもない本格的な説教（「説経」）語りであること、そのことが山鹿をしてあぜかけ姫／俊徳丸一連の語りを語らしめている深い理由であり、遠い伝来のあることと思ひ当たる。

野村編著『肥後・琵琶語り集』では「十あぜかけ姫」「十一 二代長者（俊徳丸）」と、つづけて採録される。

つづいて「菊地くずれ」一段／三段（約五十一分）と五段より（約二十分）と。およびインストルメンタル（約二分）が、一九七四年九月二十六日のRKK熊本放送ス

タジオでの録音だという。「菊地くずれ」については木村理郎氏（『肥後琵琶弾き山鹿良之夜話』三二書房（一九九四）の著述あり）が解説を書く。いったいどれほどの長さを琵琶弾きたちは語るのか。理郎氏の父、木村祐章は一九五一年に山鹿良之と出会い、一九六三年ごろより「菊地くずれ」の口述筆記を開始し、それは九段だった。RKK熊本放送は十段らしく、全体で十二段だとも。十年をへだてての二種の「菊地くずれ」を聞き比べる立場に理郎氏はいるわけで、「時代をへたなりの説明の工夫もあり、隈部の辛辣さを強調する語り、別れの場面での浄瑠璃的な語りや琵琶の調子には牙えが感じられる」とのことである。

とができる。合戦物や軍記を管理した中世的宗教者のすえに山鹿氏らは立つのであるろう。芸能（的宗教）者と書いてみたい理由だ。「道成寺」は一九八九年十月十四日、山鹿宅にての録音（約二十九分）で、兵藤裕己氏による。解説書に見られるように、小オクリ、コトバプシ、大オクリ、ウレイカカリ、セリフなどが一々記されるのは、聞き書きによって山鹿さんに確かめ確かめ記入していった結果であり、労作だろう。「山鹿の様々に録音された道成寺の演奏の多くの中で、龍が日高川をすばやく渡ることや、彼女が釣鐘を溶かして、不幸な若い僧が命を落とすときの、彼女の尾が釣鐘を鳴らす音を表現する擬音語を含んでいるところが聞き所である」（ヒュー・デフランティ氏）。演唱者はこのとき九十歳に近いと思われる。琵琶の手が思うようにうごいていないとは言える。それでも日高川をわたる女の執念のすばやさに聴く、ナガシの手を十分に堪能できる。彼女の尾で鐘を鳴らす擬音語とは、寺の高扉を乗り越えるときのことだろう。「鐘楼の つーりがーねー 鳴り 渡ーるーウー ウー▽ ごおーんおんごおーんおん」と、ごおーんおん数回を繰り返すところ。鐘楼（シユドウと聞こえる）の釣鐘

に尾があつたのだろうという解釈である。

日本伝統文化振興財団によるプロデュースで、貴重な音源がこうして大衆化された。伝統文化（芸能、音楽）とは何だろうか。端的に言えば（暴論でないと思うが）、いま聴いている音なり声なりが過去へ伸びてゆき、数百年を越えて、中世の世界へと届くことにほかならない。数百年を越えるとは、ある種のしがらみや忘却のかべに抵抗することであり、ゆつたりした時間を共有しながらも流れを遡る。忙しい現代人には最も不得意なことかもしれない。

「法具としての琵琶の在り方が、三味線との交替を困難にした」と兵藤氏は言う。九州の芸能（的宗教）者たちは「芸能者が同時に宗教者でもあるという中世的な芸能伝承の在り方」（同）を近代にまでこのした。しかも二十世紀のほぼ終わりにまでたどり着いて、われわれに口承／音楽資料として受け渡されることとなった。

思うに口承（＝伝承）文学（語り物はその重要な一部）研究は、近代化や男性優位や差別社会の進展によって、多く回収されるか、「伝統」という名との妥協によって、しぶとく生き延びるかする諸文化の、つい傍らにありながら、けつして回収されざるはずの、基層

的、民俗的文化を、積極的、主題的に見だし、それらに向けて持続的な眼差しを注ごうとする知的活動であるから、多少なりとも社会の動勢に対し、抵抗する姿勢を保つこととならざるをえない。女性史や女性民俗学と、その点はよく似ると言える。そういう抵抗感のある研究を口承文学研究が喪失したら、もうあとながない。

語りの現場について、滅びゆくとか、喪われるとかいった言説が行われるたびに、兵藤にしる、多くの口承文学研究者が抵抗してきた理由は、そのことだろう。しかし少数者の現場であることにはまちがいないので、音源が正しく次代へ受け渡されることは必須の条件である。日本中世文学研究は山鹿良之氏からあまりにも多くのことを学んだが、さらにそのことの意味を深める作業がこれからではないか。（ふじい・さだかず／立止大学）

DISC 1

- ・ワタマシ（作詞：不詳 作曲：不詳）
- ・収録：1963.31 録音 熊本市立熊本博物館 所蔵【モノラル録音】
- ・道城寺（作詞：不詳 作曲：不詳）
- ・収録：1989.10.14 山鹿良之宅にて録音 兵

藤裕己所蔵【ステレオ録音】

DISC 2

- ・菊池くずれ（一段～三段）（作詞：不詳 作曲：不詳）
- ・収録：1974.26 株式会社熊本放送（RKK）
- ・スタジオにて録音【ステレオ録音】
- ・菊池くずれ（五段より）（作詞：不詳 作曲：不詳）
- ・収録：1974.26 株式会社熊本放送（RKK）
- ・スタジオにて録音【ステレオ録音】

DISC 3

- ・あぜかけ姫（作詞：不詳 作曲：不詳）
- ・収録：1970.106 山鹿良之宅にて録音 野村眞智子所蔵【モノラル録音】
- ・インストルメンタル（作詞：不詳 作曲：不詳）
- ・収録：1974.26 株式会社熊本放送（RKK）
- ・スタジオにて録音【ステレオ録音】（VZCG8377～9）。

平成19年度（第62回）文化庁芸術祭

- 部門 レコード部門
- 贈賞種別 芸術祭優秀賞
- 受賞者 財団法人日本伝統文化振興財団
- 受賞対象 肥後の琵琶弾き 山鹿良之の世界（語りと神事）